

家庭科

自己の変容を促し、新たな生活を創る家庭科の題材開発

—新領域「希望（のぞみ）」の時間との効果的な関連を探る—

藤井志保

1 はじめに

本学校園では、文部科学省研究開発指定校として「社会的自立の基礎となる能力・態度及び価値観の体系的な育成のための、幼小中一貫の新領域による自己開発型教育の研究開発」の第2年次として新領域希望（のぞみ）の研究開発を行っている。この希望（のぞみ）は、全学年で道徳及び特別活動の一部、総合的な学習の時間を削減して実施している。

この研究開発において育てたい子ども像は、「様々な人々と共に、積極的に粘り強く課題解決に取り組む中で、社会において有為な人となるべく自己の向上をはかる子ども」である。このような力は、課題発見・追究や問題解決の資質・能力、学び方の習得などについて家庭科の学習における課題解決の過程においても育成するものである。

本研究も2年次にあたり、各教科等との関連性についてもより明らかにして取り組んでいく必要がある。特に、自己の生活を見つめ自己の変容を促す家庭科教育において培った課題発見・追究・解決の能力は自己の現状をとらえ、成長目標を設定したり、能力の伸長をめざして取り組む希望（のぞみ）の自己開発過程において生かすことのできる力であると考えている。

そして後述するが、これまでも本学校園では家庭科教育と総合的な学習の時間、道徳、特別活動とを相互に関連づけた取り組みを行ってきた。¹⁾

家庭科教育の使命は、主役である子どもたちが生き生きと学べる魅力的な授業を創り、子どもたちの生活実践力を豊かに育てていくことである。本学園で研究開発している希望（のぞみ）の時間

との効果的な関連を図ることがより子どもたちに生きた生活実践力を育み、自己開発を促し、人として社会に貢献する意欲と資質・価値観を身につけることにつながると考える。

2 研究のねらい

(1) 研究の方法

中学校1年生の家庭科の学習内容は、食品の栄養について学び、献立作成に関する知識を身につけ、中学生が一日に必要な栄養について学び、日常食の献立を立て実際に調理することのできる実践力を身につけることをねらいとしている。そして、この学びを土台としてさらに高齢の方に適した献立についても考え、実際に地域にお住まいの高齢の方々をお招きして一人一品班で四品の料理を作っておもてなしする「地域の方との交流会」を学びのゴールとしている。

本研究は、家庭科の学習内容と新領域希望（のぞみ）の学びの関連をどのように図れば、本教科のめざす自己の変容と新しい生活の創造をめざすことができるのかを追究するものである。よって、取り組みの過程における様々な活動が、どのように子どもたちの生活実践力を育み、意識や価値観を変容させ、新たな生活を創造しようとする力へと結びついているかを、生徒のワークシートの記述や自己評価などから検証するものである。

(2) 研究の時期と対象生徒

本実践は2013年9月～2014年2月に中学校1年生2クラス計79名を対象に行ったものである。ただし、地域の方との交流会は2月中旬実施のため本番直前までの生徒の変容を検証することとする。

また、希望（のぞみ）に関しては、中学校1年1組39名を対象とする。

3 家庭科の教科特性として意識していること

(1) 実体験の重視と家庭・地域との連携

家庭科の教科特性として、学んだことを実際に家庭や地域での生活に生かすことこそが学習となる。また、家庭や地域の人材から学ぶことにより、さまざまな生活場面においてより幅広い視野に立った意思決定が出来るようになると思う。そこで、保護者や地域の方と連携し、授業の場面に直接来ていただくなどしながら、多様な人との出会いを作り出していく。これにあてはまるのが、地域の高齢の方をお招きしての交流会である。

特にこの地域の方との交流会で作る料理については、一人一品班で四品のものを生徒たちが考えクラス全員が違う内容の料理を作る。交流会当日は、限られた時間の中で作る必要があるため、家庭でも練習することが望ましい。そのため冬休みの課題にしてそれぞれの家庭状況に応じて、買い物などの準備にはじまり、調理、試食など家族の方々にも、かかわっていただくようにしている。

そして、お客様としてお越し下さる方々は、本学園のある三原市にお住まいの高齢の方々である。民生委員さんなど地域貢献されている方が多く、その方の人生そのものに触れる機会もあり、この出会いの中で生徒は家庭科の授業の枠を越えて希望（のぞみ）の授業の中で身につけさせたい力を学ぶ機会となる。

このように実体験をともなった学びが本題材の中にあるので、希望（のぞみ）と関連を図ることで家庭科での学びだけにとどまらず、より生きた力へと変えていくことができる。

(2) 小中5カ年間のカリキュラムの位置づけ

三原学校園の家庭科部会では、小中連携の5カ年間のカリキュラムを開発中である。本学校園ではこれまでに、学校教育の中で家庭科教育が果たす役割を明確にし、各学年に柱となる教育内容で、小中5カ年間のストーリー性をもたせ、学習内容

の充実を図るカリキュラムを開発してきた。小学校では5学年で『生活の中でできることを増やそう』、6学年で『家族の一員として生活を工夫しよう』、中学校では1学年で『地域の高齢の方との交流会』、2学年で『ペア幼児とのふれあい体験学習』、3学年では『衣服の製作』を位置づけ、それぞれを柱として取り組む中で他教科等や道徳、希望（のぞみ）の時間との関連を図り、家庭や地域の協力も得て、学校行事としても位置づけながら取り組んでいる。これらはいずれも『生きる力』を育むことを大きな目標とし「人と人のかかわり」や「自分をみつめること」を学習の重点事項としている。

新学習指導要領家庭科、家庭分野においては、その改善のねらいとして「自己の生活の自立を図る」「自己と家庭、家庭と社会のつながりを重視する」「社会の変化への対応を重視する」「実践的・体験的な学習活動および問題解決的な学習の充実をはかる」ことの4点があげられている。²⁾そして、「社会の変化」の中でも、少子高齢化や家庭の機能が十分果たされていない状況に対応することの必要性が述べられ、小学校では「家族の一員として成長する自分を自覚し、家庭生活を大切にする心情をはぐくむことを目指した学習活動を一層充実する。」、中学校では「家庭の機能を理解し、人とよりよくかかわる能力の育成を目指した学習活動を一層充実する。幼児への理解を深め、家族と家庭の役割に気付く、幼児や高齢者とのふれあい体験などの学習をさらに充実する。」と改善の具体的内容が挙げられている。改善のねらい4点のうち2点は「自己」というキーワードがあり、これは本学校園の家庭科部会のテーマである「自己の変容を促し、新たな生活を創る」につながるものである。

また、「希望（のぞみ）」における子ども育成の視点には、ナラティブ（物語論的）な自己開発的活動の実施によるキャリア形成能力の自律的・統合的育成が挙げられている。本学校園の家庭科部会のテーマも、まさに「自分の物語」そして「これからの生活」を語れることでもあり、学習の見

通しを立てさせるガイダンスの活用や、自己と家庭、家庭と社会とのつながりを考えながら学習の中において自己との対話を深めたり、幼児や高齢者とのふれあい体験に関わる活動や食を通して人とかかわる学びの中に「ナラティブ・アプローチ」を取り入れることにより、より目指すべき姿に近づくのではないかと考えている。

4 家庭科と希望（のぞみ）を関連させた学習内容の位置づけ

表1 家庭科と希望の年間指導計画

家庭科（時間数）	希望（のぞみ）の時間・道徳の時間（時間数）
<ul style="list-style-type: none"> ●中学校家庭科のガイダンス(2) ●自分の成長と家族(2) 家庭生活とのかかわり ●食生活と自立(4) ・食事の役割 ・健康によい食習慣 ・栄養素の種類とはたらき ・中学生の栄養と特徴 ・食品の栄養的特質 ・一日に必要な食品と概量 ●地域の方との交流会に向けて ・献立の立て方 ・食品の選択 ・基礎的な日常食の調理 調理実習（ハンバーグ）(和食) 【生活の課題と実践】 冬休みの課題 交流会の料理づくり ・食品、調理器具の管理 ・地域の食材 調理実習 試し作りで改善していこう ・献立の改善点を見つけよう 地域の方との交流会 ・交流会のふりかえり ・よりよい食生活をめざして 【生活の課題と実践】 ～春休みの課題 Befre After～ ●1年間の学習のまとめ 	<ul style="list-style-type: none"> ●希望（のぞみ）を学ぶ意味 (6) ●桜物語第1章～未来予想図を描こう～(9) ・中学校生活の目標を立てる 本校の先輩である地域の企業の社長の の ・将来の夢を語り合おう ・未来予想図を描こう ・人生で大切なものは何だろうⅠ ●山の生活(10) ●平和公園へ行こう(19) ・平和とは何だろう ・新聞記事に学ぼう ・平和についての調べ学習 ・平和公園での活動計画立案 平和活動家 リーバーさんのお話に学ぶ ・身近な平和 私達の平和宣言を考えよう ●桜物語第1章～人生の大先輩に学ぶ～(5) ★歳を重ねることの意味(道徳) ・祖父母への聞き取り ・人生で大切なものは何だろうⅡ おいちゃんおばあちゃんの生き方に学ぶ ●地域の方との交流会に向けて(10) ・どんな交流会にしたいか ・お客様とのコミュニケーション 招待状ウエルカムボードの作成 ★お年寄りからの手紙(道徳) ・お客様への電話 ・人生で大切なものは何だろうⅢ ●1年間の学びの発表会(11) 地域の方との交流会で学んだことの発表 ・地域の方との交流会で学んだこと ・どんな8年生になりたいか ・1年間の振り返りと将来の自分

上の表1に示すように関連を図って取り組んだ。希望（のぞみ）の年間の大きな柱は、「なりたい自分を描く」「平和とは何か」「交流会に向けて」である。その中でも、「将来に向けてなりたい自分を描き人生で大切だと思うことは何か」というテーマについては、「自分と向き合う」活動として、年間通じて考えさせたので、交流会のお客様との話題の中にこれを取り入れた。このように生徒自身の人生にかかわる価値観を人との出会いの中で高めていくことが、家庭科と希望（のぞみ）の関連を図った中で一番効果的なのではないかと考

えている部分である。

5 家庭科の授業の実際

地域の方との交流会は、一人一品、班で四品の昼食の献立を考え、各班に地域の高齢の方をお招きして、食事をしながら交流を深める会である。4月から学んできた栄養に関する知識や献立作成、また調理実習や食品の選択に関する学習をすべて盛り込み実践的・体験的に取り組める。生徒たちは班やクラスの仲間と協力して、献立の立案から試し作り、事前準備を行う。この取り組みを通して、地域の方との交流を深め、お客様が喜んで下さることが自分の喜びにもなるような「おもてなし」の経験ができる。また本題材は、食を通じた人と人のかかわりや高齢者とふれあう貴重な体験ができるものであり、新領域希望（のぞみ）の時間との総合単位としても取り組み、家庭科の学びを実生活へと結びつけ広げ、自分自身の成長を見つめることのできる題材である。

ここでの達成目標は、教科としての家庭科という枠を越え、次の4つである。

- ①地域の高齢の方と食事をすることを通して交流を深める。(お客様が喜んで下さりその喜びが、自分の喜びになるように)
- ②おもてなしの心と会食のマナーを学ぶ。(お客様の立場に立ったコミュニケーション・盛りつけ・配膳・テーブルマナーなど)
- ③学習してきた食品の栄養についての知識を生かし、栄養のバランス、味付けなどに配慮し、高齢者向きの献立を考え、1年間の学びを行動化し、実践する場とする。
- ④班で協力し、衛生的で安全な調理実習ができる。この目標に関しては、ワークシートでも生徒たちに交流会の全体像が分かるように伝えた。生徒は、中学生になって、食品に含まれる栄養素について学びや栄養バランスのとれた献立作成についても考えた。夏休みには、これまでの知識も生かし「家族のための食事作り」にチャレンジし、栄養バランスや家族の好みなど「相手」を意識した献

立作成に家族の協力も得ながら取り組んだ。食に関する関心意欲は高いが、家庭では食に関する買い物から調理、片付けなどについての経験が乏しい。そこで、交流会に向けて学校の調理実習に加え家庭での練習などを取り入れたところ、家庭で調理の手伝いをする回数も増えた生徒が多く、少しずつ実践力も向上した。調理実習も班で協力して意欲的に取り組めた。しかし、子どもたちにアンケートを実施したところ、「祖父母と同居している」生徒は20人中5人、「週7日のうち一人で夕食を食べる日が何日ありますか」の問いには、3日以上あると答えた生徒が15人もいた。このことから、日頃から高齢の方とのかかわる機会は少なく、「食」を通じて人と人がかかわる経験も減少傾向にあるのが実態である。また、自分の考えを全体で発表するのが苦手な生徒も多いことから、日頃かかわる機会の少ない地域の方とふれあう体験は、子どもたちに食を通じて人と人のかかわりの大切さに気付かせ、相手に自分の気持ちを伝えるよい機会になる。

そこでこの交流会に目的意識を持たせ、またこの学習を効果的なものにするために、次の4点を活動の中に取り入れた。1) 今まで学んできた食品の栄養に関する知識を生かすために、旬のもの・地域の食材なども意識させ、班で一食分の高齢者向けの献立を4品考え、一人一品責任を持って担当する。2) 夏休みの家族のための食事作りを想起させて、『おもてなし』をという視点を大切にする。3) 学級担任とも連携し、希望（のぞみ）の時間に、高齢の方とのふれあいについてやおもてなしの心について学ぶ機会を設ける。そして、今までの学習内容とも結びつけてお客様とのコミュニケーションにおいて「平和」の視点や「人生で大切なもの」などを話題として投げかけられるようにする。4) 国語の授業においても、招待状の書き方や手紙の書き方の学びを取り入れ、実際に書いてみる。5) 生徒実行委員、教師からの家庭への通信を発行し、保護者の協力も得る。このように学習内容を、家庭生活はもちろん、家庭科以外の学校生活にも総合的に広げて取り組み、より内

容を深め「食」とそれを通しての「人と人のかかわり」の大切さに気付かせる。

(1) 和食の調理実習

交流会の献立をイメージさせるために和食の調理実習を行うことにした。メニューは、炊き込みご飯、カレーの煮付け、ほうれんそうのおひたし、豆腐のすまし汁の4品で実施した。

各班の人数は4名で、一人一品を担当しながらもお互いで助け合う調理実習をめざした。



図1 和食の調理実習の場面



図2 和食の調理実習 完成の献立

(2) 地域の方との交流会の献立の決定に向けて

家庭での実践課題として、自分の祖父母や親に交流会に適した料理について聞き取りをしてくる家庭での実践課題を出した。

そして、高齢者に適した献立について、食事摂取基準や食品群別摂取量のめやすが基準になっていることを学んだ。それにさらに図3のように、「祖父母や家族への聞き取り」「過去の先輩たちが考えた献立」「高齢者に適した献立の本」を参考にして、実践的な献立の考案ができるようにした。

自分の祖母など日常的に料理をしている家族に「おいに作り方まで聞いてくる生徒も多く「鯖の味噌煮」を作りたいというように自分で目標を



図6 各班で協力して試し作りを行う

図6は、実際に試し作りを行っている場面である。自分の担当料理だけでなく、お互いの料理をフォローしあったりする姿もたくさん見られた。

主に料理の作り方を試し作りの中で再確認したり、例えばかき玉汁の卵の散らし方など料理方法を改めて学んだりする場となった。

お客様のことを考えながら、切り方や味付け盛り

表2 生徒が考えたグループごとの献立

つけの方法など試してみて、本番への課題を見つけてあげることができた。

2014 地域の方との交流会 生徒のグループと献立表		2014.1.8版		
班	名前	献立名		
① 2月14日 (金)	1	ぶりの照り焼き	6	豚のしょうが焼き
		鯛飯		五目炊き込みご飯
		インゲンのごま和え		かぼちゃの煮物
	2	かき玉汁	7	豆腐のすまし汁
		肉豆腐		ミルクプリン
		炊き込みご飯		肉じゃが
	3	きんぴらごぼう	8	炊き込みご飯
		かき玉汁		あさりの味噌汁
		肉じゃが		きゅうりとわかめの酢の物
	4	わかめご飯	9	肉じゃが
		きゅうりのわかめの酢の物		わかめご飯
		かき玉汁		わかめときゅうりの酢の物
	5	大根もち	10	かき玉汁
		炊き込みご飯		豚の角煮・りんご入りヨーグルト
		揚げ豆腐		炊き込みご飯
		かき玉汁		ほうれん草のおひたし
		かき玉汁		かき玉汁
		ぶりの照り焼き		ぶりの照り焼き
		茶碗蒸し		茶碗蒸し
		いなり寿司		いなり寿司
		豆腐とわかめのすまし汁		豆腐とわかめのすまし汁
③ 2月19日 (水)	1	ぶりの照り焼き	6	鯖の味噌煮
		鯛飯		五目ご飯
		わかめときゅうりの酢の物		白和え
	2	かき玉汁	7	豆腐とわかめの味噌汁
		餃子		チーズ蒸しケーキ
		豆ご飯		天ぷら
	3	ポテトサラダ	8	たこ飯
		かき玉汁		茶碗蒸し
		ぶりの照り焼き		わかめと豆腐のすまし汁
	4	たこ飯	9	揚げ出し豆腐
		わかめときゅうりの酢の物		赤飯
		せん切り野菜のすまし汁		ポテトサラダ
	5	ぶりの照り焼き	10	キャベツの豚汁
		菜飯		ぶり大根
		ひじきの煮物		五目ご飯
		豆腐とわかめの味噌汁		わかめときゅうりの酢の物
		ぶりの照り焼き		かき玉汁
		たこ飯		ぶり大根
		茶碗蒸し		鮭ご飯
		豆腐とわかめのすまし汁		ひじきの煮物
				大根と油揚げの味噌汁

6 希望（のぞみ）の授業の実際

中学校1年生の希望（のぞみ）の1年間の柱となる単元を「桜物語」と名付けた。そのおおまかな内容について触れ、どのように家庭科の学びと関連しているかを述べる。

概略としては、家庭科の授業で栄養バランスや献立作成そして調理方法に関する知識とその実践方法を学び、その中にも「相手のために」という視点や、食を通じてのコミュニケーションを盛り込みながら生活実践力を高めていく。さらには、希望（のぞみ）の授業との関連を図ることで、なぜそうするのかを考えたり、相手の事も考えながら自分がこのようにされたら嬉しいから自分も他者にそうするというように、どう行動するのかを自分で決めたり、自分はどうなりたいと考え自分の変化に気が付くなど「社会の形成者として必要な態度や価値観」をも育てていくことを目標としている。

まず「桜物語」という単元は、桜の木がすべての花が咲くのを待って散ることから、その木のよように支えあえる集団をめざし成長していこうという意味を込めた。そして、自分と向き合う活動の中に「自分を語る」ナラティブ・アプローチを取り入れ、桜の変化と重ねて季節の節目に自分を見つめる「自分物語」を成長のあしあととして残していくことから「桜物語」とした。

具体的には、なりたい自分を描き、将来の夢を語り合ったりする活動の中に「自分が生きていく上で大切にしたいこと」を考えさせるようにした。

「人生の大先輩に学ぼう」では、まず道徳で歳をとるとはどういうことかを学び、自分の祖父母の立場になって考えた。内面的変化に着目した発言を取り上げ「歳を重ねることで多くの人との出会いが自分を成長させる」など高齢の方の生活やそこにある価値に目を向けることができるようにした。そして、長い人生を生きてこられた祖父母や家族から「人生のエピソード」や「人生で大切なもの」などの経験を聞き取る活動を通して、孫である自分たちに対する愛情と、人生経験の中から

見出した広い視野からの「こんな人に成長してほしい」という深い思いに触れることができるようにした。そしてそれをクラスで交流し、自分の言葉で語り合うこと（ナラティブな活動）を通して、祖父母をはじめとする周囲の人々への感謝の気持ちを引き出し、その気持ちをさらに行動化するように導いた。祖父母へのインタビュー項目は、次の内容で聞き取りをした。

人生の大先輩から学ぼうのワークシートより

交流会へは、地域の高齢の方がお客様としてお越し下さいます。食事をしながらお話しします。そして、人生の先輩から生き方を学び(略)交流会では、自然体でお話ができたらいいのですが、ちょっと緊張するかもしれません。お客様は、みなさんのおじいちゃん、おばあちゃんと同じくらいの年齢なので、ちょうど「孫」を見るような思いでお話をされる方もいらっしゃると思います。そこで、おじいちゃんおばあちゃんにお時間を取っていただき次の内容についてお話を聞いてみましょう。

- ① 私達と同じ年の頃、どんな夢を持っていましたか。
- ② 人生観が変わるよう出合いや出来事
- ③ 仕事や子育ての中で生きがい
- ④ 歳を重ねてこそ分かったこと
- ⑤ 平和について
- ⑦ 私、僕が生まれた日のこと
- ⑧ 大人になる私達に願うこと
- ⑨ 座右の銘

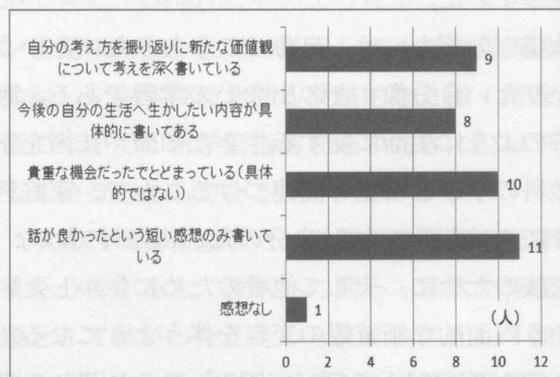


図7 家庭での聞き取り後の意識

この課題に取り組んで、生徒たちがどのように受けとめたかその感想の内容を評価してみた。祖父母の聞き取りの状況は個人差がある。図7のように、祖父母の語りを聞いて、自分を振り返り、新たな価値について記述している生徒が9名、具体的に生活にこんなことを生かしたいと書いていた

生徒が8名いた。いずれもこの17名は、祖父母と話し、自分のことも考え、祖父母の考えも伝わり充実した時間だったようである。その反面深く考えるまでには至っていない生徒も半数近くいた。家庭での課題は個人差があるが、それを希望（のぞみ）の授業で語り合っ、考えを広げ、より高めていくために次のような授業を実施した。

それは、祖父母の「生きていく上で大切なもの」「こんな人になってほしいという願い」を受けとめ、交流する活動を通じて、人生の大先輩の言葉をこれからの生き方に結びつけて考え「なりたい自分」を心に描き、自己の向上をはかろうとすることを目標とした授業である。家で聴き取ってきたことを交流し図8のように各班から出した10個の人生訓も参考にしながら、自分が大切にしたいことを語り合った。自分の祖父母に聞いたことが土台になり、そして仲間の祖父母の言葉も興味深く考えながら聞いていた。



図8 班交流と各班から出た祖父母の人生訓

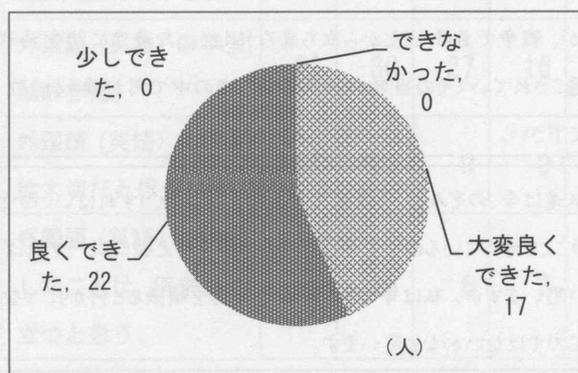


図9 「仲間と意見交流し人生で大切なものを見つけることができましたか」という問いの答え

図9のように、授業後のワークシートの自己評価も高く、授業で語り他者の意見も聞くことでより深められ「今の自分が大切にしたいこと」が見つ

けられた生徒がほとんどだった。このように生徒たちが比較的ていねいに取り組んだ。そしてこの授業の1ヶ月後、交流会に向けてお客様とどんなお話をしたらいいかという話題を考えてくる課題を出したところそのワークシートの中に次のような話題があった。

希望（のぞみ）の時間に祖父母の人生から学ぶ授業を実施したことを生かした内容の話題を書いている生徒が39名中30名いた。さらには、それより前に「平和公園へ行こう」という単元で「平和とは何か」を考えたが、その内容を盛り込んでいる生徒もいた。次に希望（のぞみ）の時間に学んだことを話題に書けていた例を挙げてみる。

お客様との話題を考えようのワークシートより

僕は将来の夢が2つあります。作家と海外青年協力隊で働くことです。作家になりたい理由は…(略)海外青年協力隊で働きたい理由は昨年平和公園でリーパーさんという人の話を聞いてその影響を受け世界のために働きたいと思いました。〇〇さんは中学時代どんな夢を持たれていましたか。

僕は今テニス部でテニスを頑張っています。僕の将来の夢は体を動かすことが好きだからスポーツ関係の仕事ができればいいです。〇〇さんは中学生の頃どんな夢を持っていましたか。また何を頑張りましたか。それが、のちに」どのように役立ちましたか。

東京オリンピックや高度経済成長でものすごい輝いていた状況の日本で生きていて、その時代に楽しかった事や苦しかったことは何か。戦争で負けたことから立ち直ろうとしていた時代に幼少時代を過ごされていてその当時の状況と今の世の中で何が違うかを教えてください。

私達は今、のぞみという授業で夢を叶えるにはどうすればいいかということを考えているのですが〇〇さんは夢を叶えるにはどうすればよいと思いますか。私は今できる勉強や部活を頑張ると何かにつながるのではないかなと思います。

私は生きていく中で一番大切だと思うのは人との出会いや家族友だちなど人のかかわりだと思います。〇〇さんは生きていく中で何が大切だと思いますか。

7 考察

新たな知識を得たり、実体験をしたり学校では様々な学びがある。その学びが、自己の変容を促し、新たな生活を創るに至った状況とは、その学んだ場面だけにとどまらず生活の他の場面でその力が生かされる状況であると考えられる。

家庭科と新領域希望（のぞみ）の取り組みと生徒たちの声や反応から、家庭科の内容と希望（のぞみ）の時間の関連を意図的に図ることは、生徒一人一人の変容につながっている。家庭科の学びの中にも、献立を考えたりする場面で、家族に聞き取りをすることで、誰かのために料理を作るという視点が生まれた。そして、この家庭科の学びと平行して、希望（のぞみ）の時間に、「人生で大切なものは何か」といったテーマで同じように祖父母に聞き取りをおこない、長い人生経験をもとに語られた自分への願いなどを聞きそれをクラスで語り合うことで価値観を変えるような言葉に出会った。

今年度の地域の方との交流会が昨日終わった。生徒たちは、自分の祖父母と同じくらいの年齢のお客様のおもてなしをした。ある班では会話の中で「座右の銘」の話になったり、また別の班ではお客様の中学時代の夢の話から自分の将来の夢を語り合っていた。

希望（のぞみ）は、自分はどうありたいという「なりたい自分像」との出会いの学習である。家庭科のように生活に関する生きた知識や技術を学ぶ教科の学びと希望を関連づけることで、家庭科で身につけたその力を、自分のためにだけでなく家族のために、そして他者のために生かしたいという内面的な価値観の変容を伴うようになる。

今後も、家庭科と希望（のぞみ）のそれぞれの目標を明確にしながらも、効果的な関連のあり方を探っていきたい。

〈参考および引用文献〉

- 1) 藤井志保：広島大学附属三原学校園研究紀要 第2集，2012.3 第3集，2013.3.
- 2) 文部科学省：「中学校学習指導要領解説技術・家庭科編」，2009，教育図書.